

「我、いずこに行かん」

ヨハネによる福音書 6:60-71

ヨハネによる福音書の6章は、イエスさまが5つのパンと2匹の魚で、男だけで5千人もの群衆の飢えを満たしたという出来事と、それを巡っての群衆と弟子たちの反応について記されている箇所です。

大勢の群衆は、イエスさまのなさったしるしを通して、満腹したことから、イエスさまを自分たちの支配者(王)にしようとしたことが、まず記されていました。人はだれでもそうですが、肉の欲を満たすことに最大の関心をもつものです。パンの問題、食料問題は、いつの時代も私たち人間にとっての最大の関心事です。イエスさまもそのことは、十分に理解しているところです。だからこそ、自分の周りに集まって来た大勢の群衆を、「飼う者のない羊のようだ」と憐れみ、彼らに食べ物を与えようとしたのです。

しかし、イエスさまのなさった「しるし」は、ただ単に人々の食欲という肉の欲を満たし、彼らを満足させるためだけのものではなかったのです。イエスさまのなさった御業は、<人は何によって生きるのか>という、より深い根本的な問題を示すためでした。この問題提起の背後には、イエスさま自身が、「荒野の誘惑」の中で体験された試練が深く関わっていると思います。この荒野の誘惑の記事は、ヨハネによる福音書には記されていませんが、マタイやルカによる福音書によると、イエスさまが神の子としての自覚をもって、新たな歩みを始めるにあたって、荒野で40日間断食した時のこととして記されています。つまりイエスさまが、飢え渴きの極限状況の中で、サタンは、「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」と誘惑したのです。荒野に転がっている石灰岩の石がパンに見えるような空腹の中で、イエスさまは「人はパンだけで生きる者ではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」(マタイ福音書 4:4)という、聖書の申命記(8:3)の言葉を引用してその誘惑を退けたのです。

イエスさまは、そのような体験を通して、「生きる」ということは、単に肉体的に生存するということではなく、もっと深い意味において、神さまのみ言葉に聞き従い、神さまとつながることによって、「永遠の命」にあずかることだと悟ったことでしょう。そして、自分が神の子としてこの世に遣わされたのは、すべての人に神さまのみ言葉を伝え「永遠の命に至るパン」を分かち与えるためだ、否、それだけではなく、自分自身が「命のパン」となって、人々に真の命を与えることだと、自覚されたことでしょう。イエスさまが5つのパンと2匹の魚で5千人以上もの群衆の飢えを満たしたのは、そのような霊的な「命のパン」を人々に分け与える「しるし」であったのです。

しかし、イエスさまが分け与えたパンで満腹した人々は、神の子としてのイエスさ

まの「しるし」を理解しようとせず、いつでもパンを食べられることを求めて、イエスさまを「王」に仕立てようとしたのです。人間の欲というものは、際限がないものです。満たされても、満たされても、さらに多くの物を欲するのです。イエスさまはそのような群衆を振り切るようにして、一人山に退かれたわけですが、群衆はなおもイエスさまを探し回り、ついにカファルナウムの町でイエスさまを見つけ、町の会堂でイエスさまと対話し、「命のパン」についてのイエスさまの話を聴くことになったのです。その内容については、前回ご一緒に学びましたので繰り返しません、イエスさまがそこで繰り返して語られたことは、「わたしが命のパンだ」(34)ということです。

昔、モーセの時代、イスラエルの民は神さまによってエジプトの奴隷の地から解放され、約束の地に向かう途上、40年間荒野をさまよいました。その途上人々は「食べ物がない」「水がない」と言って何度もつぶやきモーセを困らせましたが、神さまはそのつぶやきを聞き、モーセの祈りに応えて、天からマンナ(マナ)という不思議な食べ物を降らせて、民を養われたのです。イエスさまはその出来事から、「わたしが天から降って来た命のパンだ」(51)と言い、あなたがたの先祖は、そのマンナという天からのパンを食べたのに死んでしまったが、「このわたしを食べる者は、永遠に生きる」と言われ、「わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである」と語られたのです。その言葉がさらにユダヤ人の群衆たちに戸惑いを与え、彼らは52節に記されているように、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と激しく議論し始める結果になったのです。そこでイエスさまは、さらにかみ砕いて、「はっきり言うておく、人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」(53)と言われたのです。このイエスさまの言葉は、後の聖餐式の制定の言葉にも反映されているのですが、イエスさまの意図は、やがてご自分が受けようとしている十字架の死と復活の意味を暗示したのです。つまりイエスさまは、「これから自分が受ける十字架の死は、あなたがたのために自身の肉を裂き、血を流すことだ、それはあなたがたの罪を贖い、あなたがたが一人も滅びないで永遠の命を得るためだ。だから、わたしが差し出す肉と血にあずかって、復活の命にあずかって欲しい」。そういう深い霊的な意味を込めて語られたみ言葉であったのです。この言葉に基づいて、代々の教会は、聖餐式のたびに、パンを裂いて会衆に分け与えて「これはあなたのために裂かれたキリストの体です」と言い、ぶどう酒(液)の入った杯を配って「これはあなたの方のために流されたキリストの血潮です」と語って、共に十字架と復活のキリストを味わうわけです。

イエスさまがここで語られた言葉の意味を、そこに集まっていたユダヤ人の群衆が

どれだけ理解できたか分かりません。おそらく、お腹を満たす肉のパンのみを求めていた多くのユダヤ人にとって、イエスさまの意図は理解できなかったことだと思います。パウロはコリントの信徒への手紙(一)の中で「十字架の言葉は、ユダヤ人には躓かせるもの、異邦人には愚かなものですが、召された者には神の力、神の知恵である」(1:23)と述べております。イエスさまを取り囲んでいた多くのユダヤ人たちにとって、十字架の言葉は「つまずき」以外の何物でもなかったのです。

それは、ユダヤ人の群衆たちだけのことではありませんでした。今日の箇所を見ると、「弟子たちの多くの者」にとっても理解しがたいことであったようです。60節にはこう記されています。「ところで弟子たちの多くの者は、これを聞いて言った『実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか』」。ここで言う「弟子たち」とは、いわゆる「12弟子」以外の人々で、イエスさまを一応、メシア(救い主)と信じ、イエスさまに従って来た人たちのことです。そういう人たちまでが、「そんな話、聞いておれない」とつぶやいたのです。

前に出てきたユダヤ人の群衆のつぶやきは、イエスさまが「天から降って来た命のパンである」と言われ、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲め」と語られたことによるものでした。それに対してこの弟子たちのつぶやきは、イエスさまが「わたしの肉」「わたしの血」という言葉で、ご自分の十字架の死を匂わせたことによるものと思われます。この弟子たちはイエスさまに対して力ある「栄光のメシア」という期待をもって、従って来たのです。ところが、イエスさまの口から、「自分は肉を裂き、血を流すことによって人々に命を与える<苦難のメシア>であると聞かされ、失望し、つぶやいたものと思われます。そういう意味において、この弟子たちの信仰は、イエスを「王」にしようとした大勢の群衆と大きな差はないのです。結局は、イエスさまを通して、自分の利益と自分の栄光、自分の欲求と幸せを満たすことを求めているのです。12弟子の一人であるイスカリオテのユダがイエスを裏切り、主イエスを見捨てたのも、やはり、イエスに対する自分の期待が裏切られたという思いからでした。

イエスさまは、弟子たちのつぶやきを聞いて「あなたがたはこのことにつまずくのか」と嘆かれ、63節で、「命を与えるのは”霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたたちに話した言葉は”霊”であり命である」と言われました。「信仰」とは、自分の期待や願いや欲望を、神さまに投げかけ、肉の思いを実現させることではない。そうでなくて、み言葉とみ霊(聖霊)を通して神さまのみ心を知り、神の意思に従うことです。イエスさまは「肉の思いではなく、神の霊に従って命を得よ」と言われたのです。

大分昔のことになりますが、ある教会の信徒から、「教会へ行っても何のメリットもないから、教会を辞めさせてほしい」と言われて、ショックを受けたことがあります。

